

Column 知財の国際舞台から

Vol.17 「バイオリンから聴こえるもの」

WIPO PCT国際協力部部長 夏目 健一郎

1. アジア勢

先日、ジュネーブでバイオリンの国際コンクールが開催された¹。数百人規模の中から事前選考を経た44名が実際にジュネーブに集い頂点を目指した。国際コンクールであるのでもちろん応募は世界各地からあるのであるが、事前審査通過者の顔ぶれを見るとアジア勢が多いことに気付く。複数国の国籍を持っている応募者もいるがそれも含めて数えてみると、44人中、日本、中国、韓国勢は合計21名に上る²。アジアの勢を感じる。

2. 統計発表

2017年の知的財産に関する統計がWIPOから発表された。ハイライトの一つはやはり国際特許出願数（PCT制度）において、中国が日本を抜いて世界2位になったことであろう。中国は既に国内特許出願数では世界トップであり、しかも全世界の40%以上を占めるほどであったが、今回、国際特許出願数においても順位を上げたことは、中国のビジネスが国内に留まらずよりグローバルな視野を持って行われるようになってきていることの表れとも言えよう。

3. WIPOでは

21世紀に入り国際特許出願数でドイツを抜いて2位になった後は順位を維持していた日本であるが、2017年にその座を中国に明け渡すことになった。2010年以降、韓国、ドイツを抜き3位になった中国はその後も国際特許出願数を顕著に伸ばした。特筆すべきはその伸び率と言えよう。2016年は前年比40%以上の伸びを示し、2017年も前年比13%と二

桁成長である。ちなみに二桁成長は上位15カ国のうち中国のみである。中国は2003年以降二桁成長を続けており、仮にこのペースで伸びが続くとすれば3年後には米国を抜いてトップになる可能性すらある。因みに日本は順位こそ3位となったものの、前年比6%を超える成長であり、これは先進国の中では群を抜いている（トップの米国は0.1%増、4位のドイツは3.7%増、5位の韓国は1.3%増、更にフランス、オランダは減少であった。）。

出願人別でもアジア企業が上位に名を連ねる。ファーウェイが1位、ZTEが2位と上位を中国勢が占める。その後、インテル、三菱電機、クアルコム、LG電子、BOE³、サムスン電子、ソニー等が続き、トップ10のうち7社はアジア企業である。トップ10圏外ではあるが、13位のLE Holdings⁴（中国）は2016年に9件だったが2017年には1354件と文字どおり激増である。

一方、大学などの教育機関に目を向けてみると、アジア勢の割合は企業ほどには至っていない。カリフォルニア大学、MIT、ハーバード大学といった米国勢がトップ10の大部分を占め、アジアからは韓国が健闘し、ソウル大学校⁵（7位）、ハニャン大学校⁶（8位）、KAIST⁷（10位）がトップ10入りしている。ただトップ20まで広げるとアジア勢はおおよそ半分を占め活躍振りがうかがえる。日本からは13位に東京大学、20位に東北大学がランクイン。

ブランドなどと密接な関係がある商標（マドリッド制度）はどうだろうか。こちらもトップは米国

であるが、2位のドイツに続いて3位に中国、8位に日本である。ここでも中国の伸びは著しく36.3%と桁違いである。アジアではないが10位のロシアも23.9%と大きく増加した。トップ10圏外ではあるが、韓国も9.8%増と二桁増に迫る勢いである。上位出願人を見てみると顔ぶれは特許とは随分異なる。トップはフランスの化粧品会社ロレアルである。トップ10にはノバルティス（スイス）、アップル（米国）といった企業が並び、トップ10にアジアから入ったのは冷蔵庫/冷凍庫などを製造する中国のAucma⁸が唯一であった。ちなみに同社は2016年は実績0件で2017年に62件と爆増である。ベスト10のすぐ後、12位に韓国のサムスン電子が入っているが、日本企業は42位の資生堂が最高位である。上位企業を見てみると、IT関連企業が上位を占める特許とは異なり（もちろんIT企業もあるが）、化粧品、製薬といった企業がより多く利用しており、これらの企業はよりブランドを重視していることがうかがえる。

もう一つの知的財産の柱である意匠（ハーフ制度）はどうだろうか。各国別ではドイツ、スイスに続き韓国が3位にランクイン。米国、フランス、イタリアと続き、日本が7位。その後、オランダ、ベルギー、トルコがトップ10である。なお中国はハーフ制度の加盟国にまだなっていないのでランキングには登場しない。出願人別では、サムスン電子、LG電子が上位1,2位を独占しアジアからは韓国が健闘。スマートフォンに代表されるIT機器のデザインなども含まれよう。その後11位に三菱電機、24位にヒュンダイ自動車が入っているが、大部分をヨーロッパ勢が占める。デザインの国際的保護はまだ欧州優勢といったところであろうか。

興味深いのは出願が多い分野である。コンピュー

タやエレクトロニクスといった分野が出願の上位を占める特許や商標と異なり、意匠においては、家具、情報通信機器、運輸、照明器具、時計が出願分野のトップ5である。このあたりにデザインが重視される分野が垣間見える。

4. 審査結果の発表

さて、冒頭のコンクールであるがジュニアの部で優勝したのはオーストラリアの10歳の少年とシンガポールの11歳の少女であった（審査の結果1位が2名とされた。これはコンクール始めて以来初のこと。）。⁹ オーストラリアもアジア太平洋地域であるのでその意味では正にアジア勢は大活躍だと感じた。彼らが舞台に出てきたときには、かわいらしい子供が出てきた、と思ったのもつかの間、バイオリンを構えて演奏を始めると、そこには卓越したソリストがいて、プロの楽団員を従えて素晴らしい演奏を聴かせてくれた。10歳、11歳でそこまで出来るのであれば、大人になったらどうなってしまうのだろうか、と天才の心配をしてもどうしようもないので、凡人の小生は将来のスターかもしれない彼らの奏でる美しい音楽にただ身を委ねたのであった。

¹ メニューイン国際コンクール

<https://2018.menuhincompetition.org/>

² <https://2018.menuhincompetition.org/competition-2018/participants>にて事前審査通過者の情報にアクセスできる。

³ BOE Technology Group Co.,Ltd. (中国)

⁴ テレビやスマートフォンといったITを含めた多角的事業を展開する中国の企業。

⁵ Seoul National University

⁶ Hanyang University

⁷ Korea Advanced Institute of Science and Technology

⁸ Aucma Co., Ltd.

⁹ シニアの部の優勝はアルメニアの18歳の女性であったが、決勝に残った4人のうち2名がアジア勢（韓国、中国）であった。

Ken-ichiro Natsume

日本国特許庁にて審査官、審判官としてエレクトロニクス、コンピュータ関連の審査、審判業務に携わる。その間、カリフォルニア工科大学客員研究員、特許庁国際課、総務課、調整課審査基準室、外務省経済局、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部などにおいて、特許行政、国際交渉にも従事。2012年にWIPO日本事務所所長に就任し、2014年4月から現職。